

「菊と刀」の視点で見る日本人選手のメンタリティー

— 日本人選手の決定力不足を理解する一試論 —

○中野 敬三 (有)中野情報技術研究所

【緒言】

サッカーにおいて、日本人選手はチームワークにも優れ、個人的な技術も評価されておりますが、決定力不足が問題とされております。日本人選手の決定力不足を日本の文化・社会面からメンタリティーを分析し、解決策を提示する試みです。

【方法】

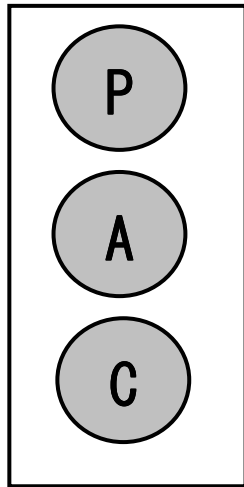
ルース・ベネディクトは「菊と刀」で、日本と欧米の子育ての違いを分析し、日本人と欧米人の違いを底の広いなべ型の生活曲線で説明しております。この生活曲線を精神分析の一手法である交流分析の考え方で分析して、日本人の決定力不足の原因と解決策を考えます。

●「菊と刀」: ルース・ベネディクトは、第十二章「子供は学ぶ」で、日本の生活曲線は、アメリカの生活曲線のちょうど逆になっている。それは大きな底の浅いU字型曲線であって、赤ん坊と老人とに最大の自由と我儘とが許されている。幼児期を過ぎるとともに徐々に拘束が増してゆき、ちょうど結婚前後の時期に、自分のしたい放題のことをなしうる自由は最低限に達する。この最低線は壮年期を通じて何十年もの間継続するが、曲線はその後再び上昇してゆき、六十歳をすぎると、人は幼児とほとんど同じように、恥や外聞に煩わされないようになる。アメリカではわれわれはこの曲線を、あべこべにしている。幼児には厳しいしつけが加えられるが、このしつけは子供が体力を増すに従って次第にゆるめられていき、いよいよ自活するに足る仕事を得、世帯をもって、立派に自力で生活を営む年ごろに達すると、ほとんど全く他人の掣肘を受けなくなる。われわれの場合には、壮年期が自由と自発性の頂点になっている。年とってもうろくしたり、元気が衰えたり、他人の厄介者になったりするとともに、再び拘束が姿を現わし始める。(長谷川松治訳)

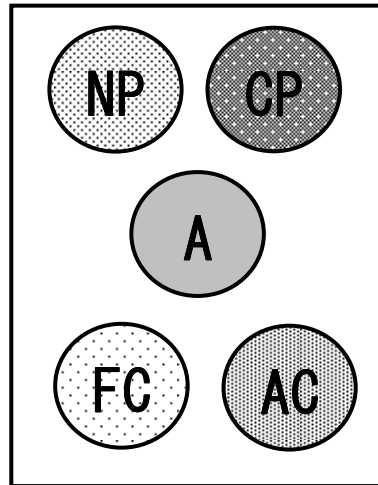
●交流分析

フロイトの精神分析から発展しました。本試論では構造分析と脚本分析を使用します。

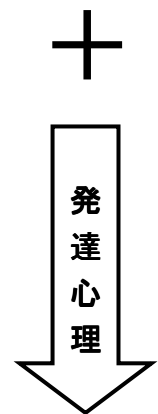
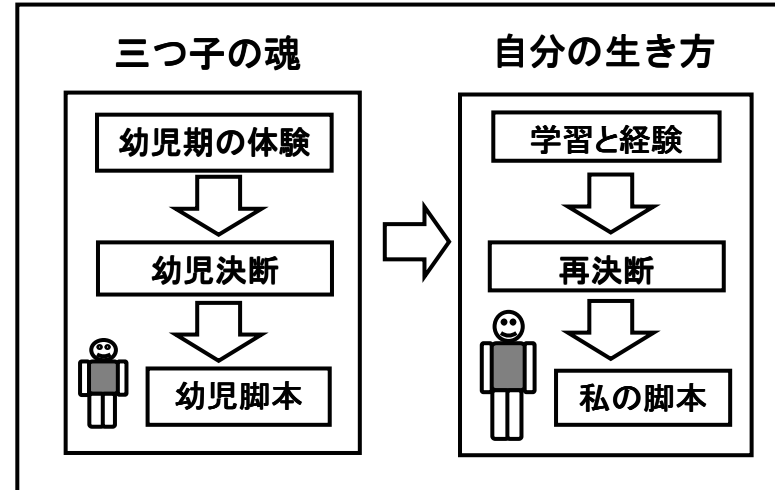
構造分析（基本）



構造分析（発展）

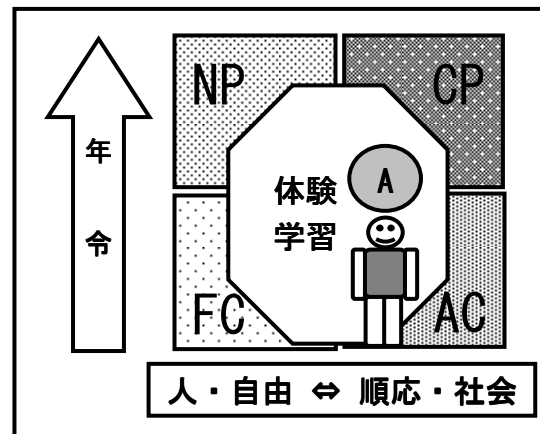


脚本分析（人生脚本：生き方の癖）



記号の説明

- P: Parent（親の自我状態）
- NP: Nurturing Parent（保護的な親）
- CP: Critical Parent（批判的な親）
- A: Adult（大人の自我状態）
- C: Child（子供の自我状態）
- FC: Free Child（自由な子供）
- AC: Adapted Child（順応する子供）



前提：人間は社会的動物である。
成長：赤ん坊が社会人になること

○構造分析からみた成長
赤ん坊(C) ⇒ 社会人(C+A+P)

○脚本分析からみた成長
幼児脚本 ⇒ 自分の人生脚本



●日本人の構造分析(CPA構造分析)

日本の乳児は、泣けば乳を飲め、好きな時に寝ることが出来、自分の要求が最大限に満たされる環境で育つので、自由と甘えの「三つ子の魂」が自我状態になります。

3つの状態	子供の自我状態 C(Child)	親の自我状態 P(Parent)	大人の自我状態 A(Adult)
日本人が持つ 三つ子の魂	自由な子供 FC (Free Child)	保護的な親 NP(Nurturing Parent)	
日本の少年が 学ぶべきもの	順応する子供 AC(Adapted Child)	批判的な親 CP(Critical Parent)	
子供は親の鏡		子供は親を真似ます	

●日本人の脚本分析

交流分析では、無意識のうちに人間の行動に影響を与える要因として、生き方の癖・パターンを人生脚本と考えます。三つ子の魂百までといわれますが、これは親の影響を受けて幼児期に形成された人生脚本で、幼児脚本とも言われます。

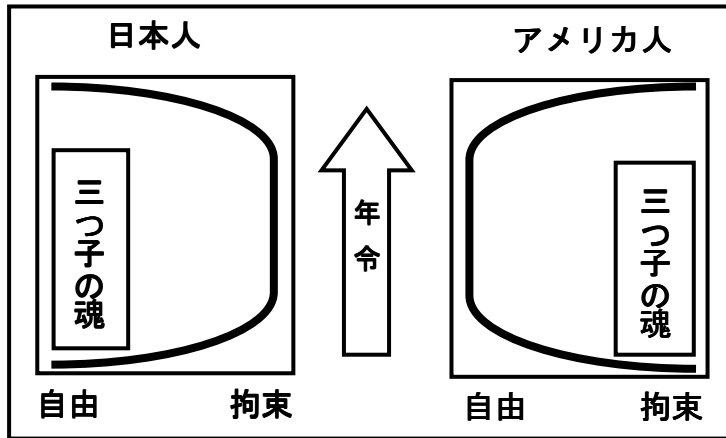
脚本分析では、人間は経験や学習を積み重ねることによって、自分の人生脚本を自分で書き換えが出来ると考え、これを再決断と云います。

日本人が赤ん坊から社会人へ成長するためには、自由と甘えの幼児脚本に対し、社会のルールに順応し(AC)、義務と責任を果たす(CP)シナリオを加える必要があります。

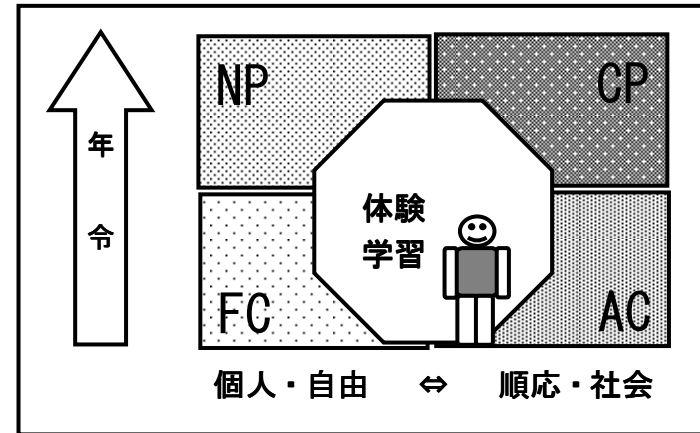
【結果と考察】

「菊と刀」 + 交流分析 ⇒ 解決策

「菊と刀」の考え方



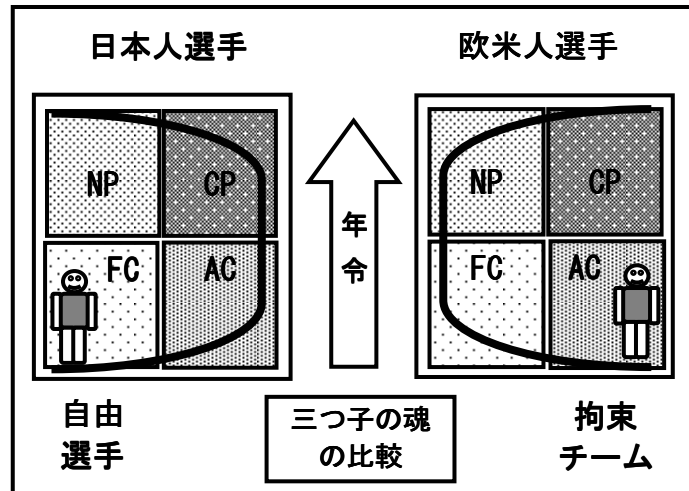
交流分析の考え方



本試論の分析の考え方

日本人選手の長所と課題

- 日本人選手の長所
 - ・工夫と練習に熱心である。
 - ・個人の能力向上に努力する。
 - ・他人の失敗に対し寛容である。
- 日本人選手の課題
 - ・個人中心の考えが強い。
 - ・甘えの気持ちで自分に妥協する。
 - ・チームに対する義務感が低い。



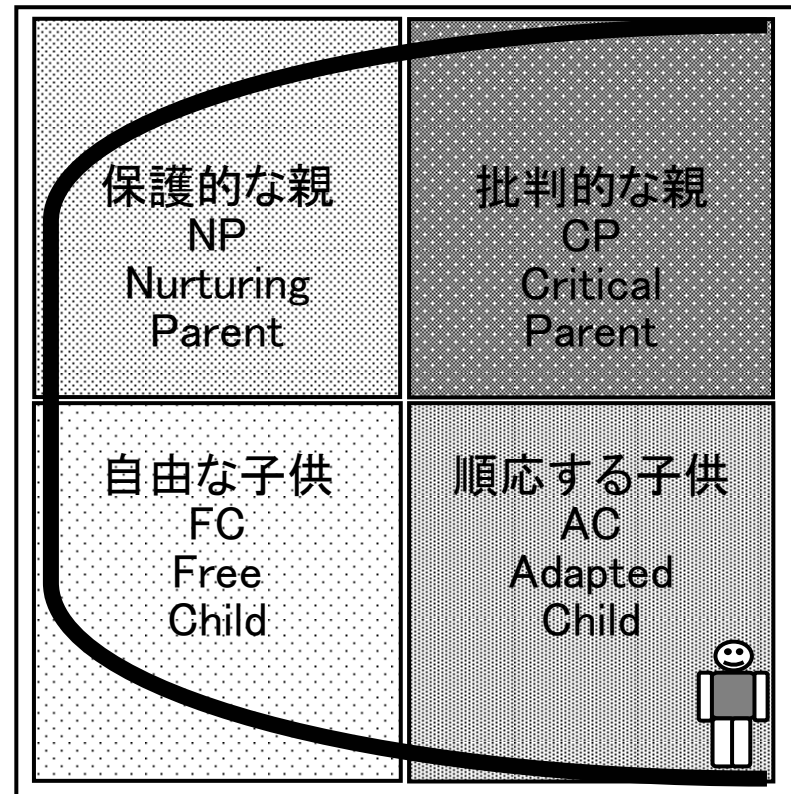
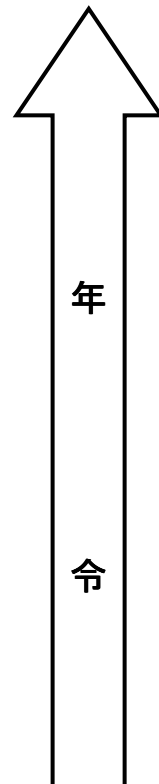
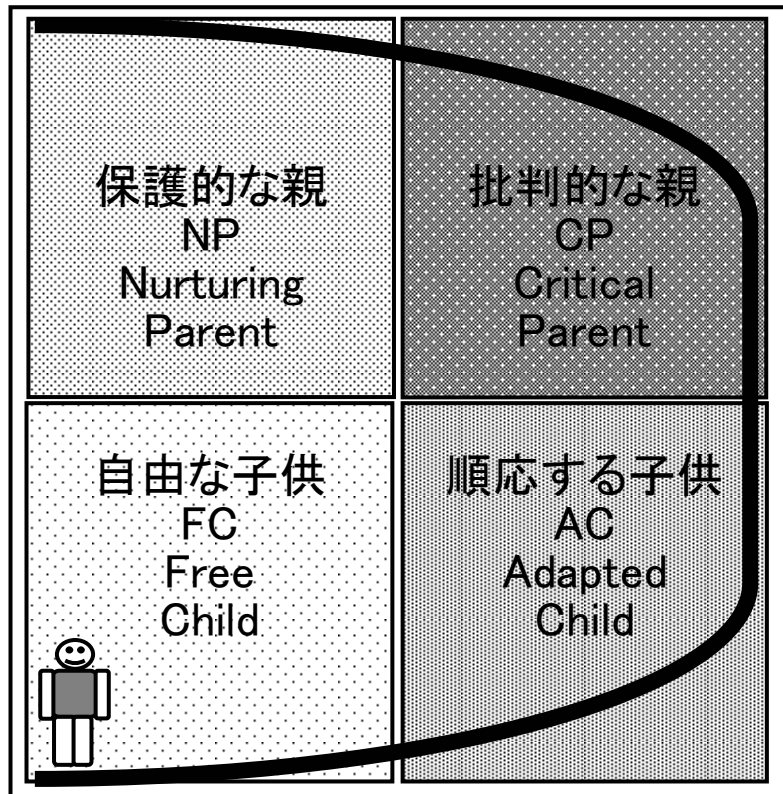
欧米人選手の長所と課題

- 欧米人選手の長所
 - ・チーム中心の考えを受け入れる。
 - ・規律に従い、義務を果たす。
 - ・チームに対する義務感が高い。
- 欧米人選手の課題
 - ・自発的な行動が求められる。
 - ・自分に枠をはめてしまう。
 - ・他人に合わせる事が不得意

「菊と刀」の生活曲線 + 交流分析の自我状態

日本人

欧米人



自由
個人

拘束
社会

自由
個人

拘束
社会

————— : 「菊と刀」の生活曲線

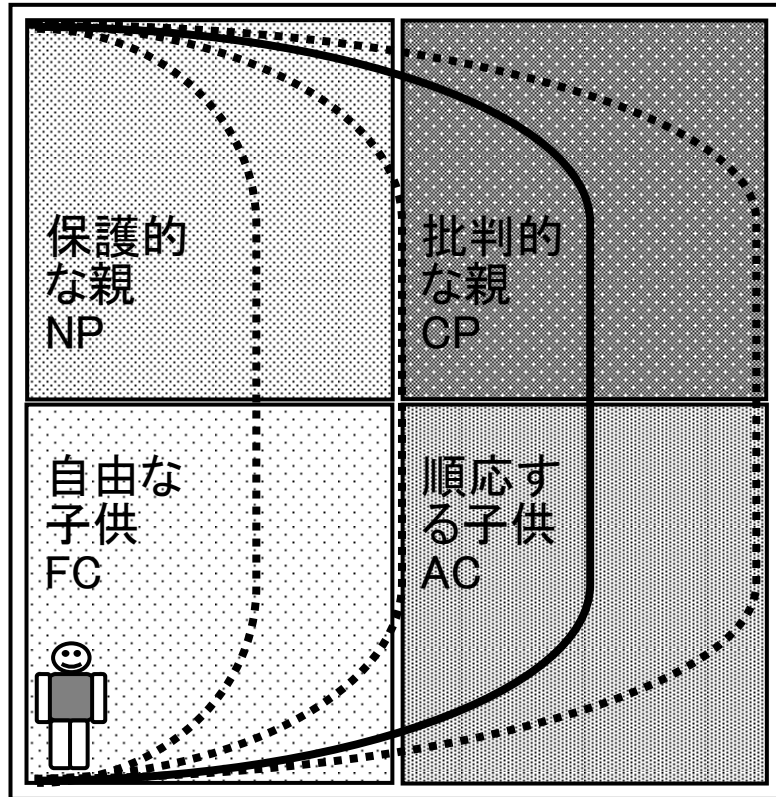
NP, CP, FC, AC : 交流分析の自我状態

★サッカーは社会的なスポーツです★

サッカーは複数の選手による連携プレーが基本のチーム競技です。

様々な生活曲線

日本人選手

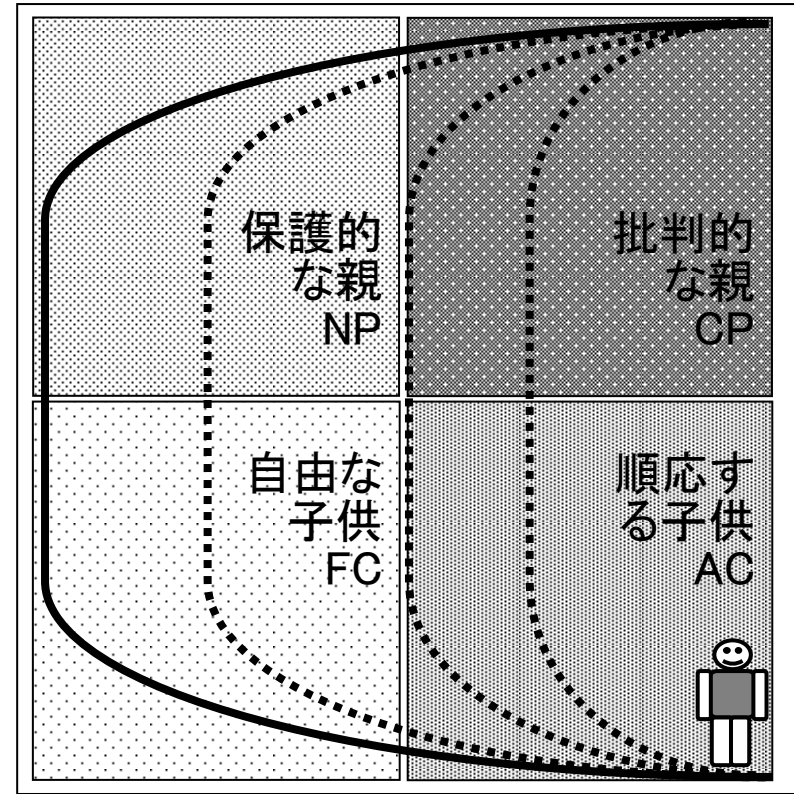


自由・選手

拘束・チーム

..... : 生活曲線

欧米人選手



自由・選手

拘束・チーム

NP, CP, FC, AC : 交流分析の自我状態

●日本人選手と欧米人選手の比較

	日本人選手	欧米人選手
「菊と刀」の生活曲線	自由 ⇒ 拘束 ⇒ 自由	拘束 ⇒ 自由 ⇒ 拘束
育児の習慣	要求時の授乳と睡眠	規則的な授乳と睡眠
三つ子の魂	自由(甘え:個人的)	拘束(規律:社会的)
三つ子の魂とスポーツ	個人競技的指向	チーム競技的指向
子供の課題	自由の抑制	拘束からの離脱
青年の課題	規律の遵守と義務的行動	自由な行動と補助の精神
幼児期の顕在自我(自分)	自由な子供:FC	順応する子供:AC
幼児期の潜在自我(親の鏡)	保護的な親:NP	批判的な親:CP
少年期の顕在自我(自分)	順応する子供:AC	自由な子供:FC
少年期の潜在自我(親の鏡)	批判的な親:CP	保護的な親:NP
成人期の顕在自我(自分)	批判的な親:CP	保護的な親:NP
	保護的な親:NP	批判的な親:CP
交流分析の生活曲線	FC ⇒ AC ⇒ CP ⇒ NP	AC ⇒ FC ⇒ NP ⇒ CP

●少年期に求められるメンタルトレーニング

日本人選手:規律と協調(Adapted Child, AC)・義務と責任(Critical Parent, CP)

欧米人選手:自由と独立(Free Child, FC)・補助と配慮(Nurturing Parent, NP)

●日本人選手と欧米人選手のメンタリティー比較(ラグビーの例)

平尾誠二氏は著書「日本型思考法ではもう勝てない」の中で、日本人選手とニュージーランド選手のメンタリティーの違いを次のように述べております。「スクラムを組むときにロックはスクラムの前列目にいるブロックの股の間から腕を通して、ブロックのパンツをグッと絞るように握ってから肩で押すんですが、日本人はしんどくなってくるとすぐにこのパックしている手を緩めるんですよ。ところが彼らはスクラムが終了するまで、絶対この手を緩めない。自分の手の感覚がなくなるぐらいまで握っている。」と述べ、「日本の選手の場合は途中で自分に妥協してしまう。最初はグッとパックしていても、しんどくなってくると自分に言い訳をして、見えないところで力を抜くんです。だからスクラムが最後までもたない。彼らはそんな妥協は絶対しないですからね。それも相手に対する妥協じゃなくて、自分に対する妥協。それを許さないどころかとことん突き詰める。そのへんの厳しさが本当に違います」と述べております。

●日本人の決定力強化のポイントはワン・フォー・オール

サッカーはチームスポーツなので、チームの勝利を最優先に考え、行動することが必要です。日本人選手は幼児期に形成された個人志向型の人生脚本を持っているので、それをチーム志向型の人生脚本に書き換える必要があります。

自立した選手としてチームの規律に従うことを決断し、ワン・フォー・オールの強い気持ちでプレーするシナリオを人生脚本に書き加える必要があります。

●サッカーと交流分析

サッカー	特性	構造分析 (自我状態)	日本人選手の脚本分析		備考
			幼児脚本 (個人)	脚本書換 (チーム)	
創造的なプレー	自発性	自由な子供:FC	◎	→	
連携プレー	協調性	順応する子供:AC		◎	
リスクのあるプレー	責任感	批判的な親:CP		○	意識的強化
サポートのプレー	配慮	保護的な親:NP	○	→	
適切な判断	判断力	大人:A		◎	学習と経験

●日本人選手の三つ子の魂

長所：自由で自発的な個人 ⇒ 創造性のある積極的なプレーが可能。

短所：甘えと我儘と依存心 ⇒ 自己中心でメンタリティーが弱い。

●日本人選手のメンタリティーの弱さの原因

湯浅健二氏は、著書「日本人はなぜシュートを打たないのか？」の中で、「不自然なほどに失敗を恐れる日本人」と述べておりますが、その原因は甘えの気持と言えます。甘えと我儘の心(FC)を持つ日本人選手は、本能的な自己防衛の気持ちにより、失敗のリスクが大きいシュートにチャレンジするより、周りの選手にパスをして、失敗を回避するという行動を選択すると考えられます。

● 日本人選手のメンタリティーと決定力不足の原因

	三つ子の魂	社会人の意識
人生脚本	幼児期に作られる	成長により書き換える
自分の位置付け	1人の人間	社会の一員
心の状態	親に依存する心	自立する心構え
行動様式	自分勝手な行動	決められた行動
態度	甘えと我儘・依存心	規律と義務・独立心
(考え方)	(オール・フォー・ワン)	(ワン・フォー・オール)
危険に対する態度	本能的な自己防衛	義務として立ち向かう
取り組む姿勢	選手中心	チーム中心
選手の気持ち	個人としての選手	チームの一員
サッカーの目標	選手個人の活躍	チームの勝利

危険に対し、三つ子の魂の甘えの気持ちが本能的な自己防衛の行動を生む。

● 日本人選手の決定力不足の解決策

ワン・フォー・オールの気持ちを共有した一体感のあるチーム作り

義務：選手として役割・責任を果たすことによる選手同士の信頼感醸成。

寛容：チームのために難しいプレーで失敗しても、その選手を責めない。

●日本チームが好成績の試合はチーム一丸

◆ベルリンオリンピック大会

日本チームがスウェーデンチームとの試合で勝利を挙げた大きな理由は、日本人選手がチーム一丸となって戦ったことだと考えられます。

◆メキシコ五輪

日本チームが銅メダルを獲得できたのも、選手全員が相互信頼の上で、ワン・フォー・オール強い気持ちで戦ったことだと考えられます。

◆ワールドカップ・南アフリカ大会

日本代表チームが本田選手を中心としてまとまったことが、決勝トーナメント進出という好成績を挙げた理由といわれております。

◆広州アジア大会

サッカー日本チームは男女とも金メダル獲得の快挙をなしとげました。

女子チームの佐々木監督は「選手たちが一丸となり、そのアジアのチャンピオンになりたいという気持ちが頂点に導いてくれた。」と述べております。

男子チームについては、「能力的には、この世代のベストメンバーではないが、一つずつ勝利を重ねながら、チームとして力をアップさせた。」と報道されております。勝利の要因は、試合期間中に選手達にワン・フォー・オールの強いチームスピリットが醸成されたからではないでしょうか。

【結言】

サッカーはチーム競技であり、選手の協調したプレーにより成り立ちます。

選手はチームという集団社会の中で規律を守り、勝利を勝ち取るためには、自ら進んでリスクの大きいプレーに挑戦する義務を果たし、貢献することが求められます。

甘えと我儘・依存心の「三つ子の魂」を持つ日本人選手は、気持ちが緩むと、本能的な自己防衛の気持ちから、失敗のリスクが大きいシュートにチャレンジするより、周りの選手にパスをして、失敗を回避するという行動を選択すると考えられます。

日本人選手が、危険回避の欲求を抑えて、失敗のリスクの大きいシュートにチャレンジするには、ワン・フォー・オールの高い気持ちを持つことが大切です。

苦しいプレスなども大切なチームプレーであることを教え、試合や練習でチームの一員として自分の役割を強い気持ちで果たすよう指導することが大切です。

チームの選手全員が、ワン・フォー・オールの高い気持ちでまとまったとき、選手は失敗を恐れずにシュートにチャレンジできると思います。たとえ、シュートに失敗しても、チームに貢献する勇敢な行動は、他の選手の共感を生むはずで

トリノ五輪のカーリングで小野寺選手はミスショットに悩んでいました。カナダ戦で、林選手たちは「負けたとしても、最後は投げてほしい」と小野寺選手を信頼しました。小野寺選手は、ワン・フォー・オールの再決断でスーパーショットを投げられたと思います。

カナダ戦の勝利は、チーム一丸になった時の日本人チームの強さを表しております。